

# 北海道医歌人会詠草

## 雪のかたち

栗山 高田 剛太

雪原の彼方に樺戸の山光り悠々空を大鷲は飛ぶ  
紺碧の空に粉雪舞ひ散らせ滑りゆく君の赤いジャケット  
里帰り終へて都会へ戻る君コートの肩の雪は悲しき  
しんしんと雪降る夜の停車場を旅立つ汽車の音は消へゆく  
幼な児を失ひし友と語りあふ静かなる夜に雪は降り積む

## 診察室にて

旭川 稲積 文子

ふだん着の和服が似合ふ人診んと近寄ればほのかに香ただよふ  
車椅子の老女が手編みし靴下を暖かいよと吾に差し出す  
形よく髪梳きて来し人が今襟によだれのしみかなしかり  
コート帽子脱がずに受診が常識か世代の異なる人と向き合ふ  
村人の心やさしや節分に鬼は内福も内とは

## 医師

江別 三宅 浩次

人のためと教へを守り数々の試練に耐へる医師の哀しさ  
ともかくも四人に一人喜寿前に医師の身にてなぜ消へ逝くか  
過労死を防ぐ立場の医師たちが倒れてゆくをだれが救ふや  
常識がない医師が多いといふ方の常識こそ非常識  
マンガ読みの知性程度で測られる常識と比べ格に差がある

## 絢爛

札幌 山口 康徳

煙草より害わずかとて大麻吸ふバカな輩のはびこる巷  
権威ある私学を汚す不埒者地下の創始者悲嘆に暮るらむ  
誌面をば虚実とりまぜ飾る奴離る諸者を引留めむとして  
頂上ゆ絢爛下降る秋風情如何なる名手も及ばざるがに  
原潜の事故起したる某国はその收拾に昼夜寝もやらず

## 新春雑詠

札幌 小国 孝徳

正月には何を讀まむかきしあたり謡曲選集あたりはどうか  
ハンス・カロッサの全集とのはざりしこと心残りに一生終らむ  
媒酌人たりし広田戸七郎先生の令嬢色紙に吾が歌書きぬ  
生涯に敢て一冊と言ふならば茂吉全歌集を吾拳ぐるべし  
「戦争で良い男がいっぱい亡くなった」ぽつりと言ひてドラマ終りぬ

## 「うつ」にまなぶ

札幌 古屋 統

過労より人間関係崩れたるうつの社員に無念の解雇  
面接を四年重ねて復職に漕ぎ着けざりし未熟医われは  
病む人はうつの成立ち転帰までインターネットに漁り盡くして  
失業保険受給期限と障害者手帳申請のタイミグはかる  
精神障害二級から取る方策はインターネットが詳述してる

## 病室にて

美唄 吉村 誠治

大腿骨折りてベットに臥す我にパラリンピックのニュース身に沁む  
三日振りに病室に来たる看護師はパーマをかけて美しくありたり  
松葉杖一本となりしリハビリに気を引締めて明日も挑まむ  
デイルームに患庭岳を眺めつつ元気な患者との会話楽しき  
退院を二日延ばして大安に帰宅せし我を息子は笑ふ

## アキノノゲシ

札幌 浜島 泉

センキユウとアキノノゲシがやはらかな秋の日差しに骸を曝す  
空港へ月に向かひて家を出づ高校卒業五十年の会  
朝顔のつるは衰へ咲く花は盛らず色の若やぎ誇る  
カンツォーネ友は老後の趣味と言ひ我は短歌を詠み始めしと  
回診と言ふも分かつたずまきぐりて先生ですね手が温いから

## 男の人生

釧路 児玉 昌彦

弔問に尋ねし家で聞き及ぶ妻子から見た別の人柄  
寡黙なる男の人生まっしぐら取り残されし家族のつばやき  
若きらの研究のロマン育てむと嵐に杭し聞ひし親父  
「偲ぶ会」ジグソーパズルの想ひ出をつないで見た男の美学  
家族には見せない顔と家族のみ知る顔のズレ男といふもの